夜桜乙女捕物帳

Yozakura Otome Torimonocho.....Onidoushin no Namida

鬼同心の涙

新装版

和久田正明

Wakuda Masaaki

学研M

新装版　夜桜乙女捕物帳

鬼固心の涙

和久田　正明

学研M文庫

常州大学図書館
藏書

新装版 夜桜乙女捕物帳　鬼同心の涙

和久田　正明

学研M文庫

2013年5月28日　初版発行

●

発行人———脇谷典利

発行所———株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元———株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 —中央精版印刷株式会社

© Masaaki Wakuda 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通　Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——
販売部直通　Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『新装版 夜桜乙女捕物帳 鬼同心の涙』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター　TEL 03-3401-2382

http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

わ-2-23

目次

第一話　鬼同心の涙　5
第二話　説教泥棒（せっきょうどろぼう）　92
第三話　親子刺客（しかく）　174

新装版 夜桜乙女捕物帳

鬼同心の涙

和久田 正明

学研M文庫

[illegible] 最新完整PDF [illegible]

この作品は、二〇〇四年三月に廣済堂出版より刊行された「鬼同心の涙―夜桜乙女捕物帳―」を改稿したものです。

目次

第一話　鬼同心の涙　5
第二話　説教泥棒（せっきょうどろぼう）　92
第三話　親子刺客（しかく）　174

第一話　鬼同心の涙

一

かよは駆けて来て井戸端にしゃがむと、両目を塞いで、「もういいかい」と大きい声で言った。

遠くの方から、「まぁだだよ」と太助の声がする。

かよは両目に手を強く当て過ぎ、視界がおかしくなったので、それをやめて地べたを見つめて少し待つことにした。その地べたに長い男の影が映ったので、かよはびっくりしてふり向いた。

夕日を背にして、背の高い町人の男が立っていた。逆光で顔が真っ黒に見える。

かよは物怖じせず、不審を表して男を見た。

白い歯が見えた。笑っているようだ。

「かよちゃん」

男がそう言った。

どうして名前を知っているの、と思いながら、それでもかよは黙って男を見ていた。男が近寄って来てかよのそばに座った。怕さは感じなかった。それより男にはどこかなつかしいような匂いさえあった。

男は手を伸ばし、かよのきれいに結い上げたお煙草盆の髪にそっと触れ、「とってもきれいだよ」と言った。

かよは嬉しくなって、おっ母さんが結ってくれたの、と答えた。

そうして間近で端正な男の顔を見て、かよは胸の鼓動が鳴るのを感じた。日頃からおっ母さんに、この子はおませな子だよ、と言われていた。

「あのね、かよちゃんは海を見たことはあるかな」

男がやさしい口調でそう言った。

かよはこっくんと頷き、去年江ノ島へ行ったの、と言った。ふた親に連れられ、春の晴れた日に遊山へ行ったのだ。

「そんなに遠くへ行かずとも、もっと近くに海はあるんだよ」

「ほんとう?」

かよは信じられない目を見開いた。沢山歩かなくては海は見られない、と思っていたからだ。

「海は好きかな」

「大好きよ」

江ノ島で一日海辺に立っていたことを思い出した。波の穂がきらきら光って、寄せては返すそれを見ていていつまでも飽きなかったのだ。夢中で貝殻を拾い集めたのも楽しい思い出だった。

「じゃ、おじさんが海を見せて上げようか」

「うん」

男は立ち上がると自然な仕草でかよに手を差しのべ、二人は手をつないで歩き出した。

男の手は汗でべっとり濡れていた。

「海の向こうにはね、悲しいことがいっぱいあるんだよ。そこではみんなが泣いてるんだ」

「えっ……」

男の言っている意味はわからなかったが、かよはすっかり男に魅せられていた。

男の声は高く澄んで耳に心地よく、また蠱惑的で、少女の心を虜にしてしまったのだ。

だが沈む夕日に照らされた男の目に、不可思議な紅い狂気が揺れていることなど、幼いかよは知る由もなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

二

その夜の六つ半（七時）になり、乙女は南茅場町の大番屋を目指して海賊橋を渡っていた。すると橋の袂の二八蕎麦の屋台の前で、伊佐山久蔵と住吉町の小吉が湯気を吹きながら蕎麦を立ち食いしていた。

「伊佐山様」

乙女が声をかけて寄って行くと、伊佐山がにやっと笑って、

「おめえも食うか」

「いえ、済ませて来ましたから」

蕎麦を断り、小吉にもぺこりと頭を下げる。

「おめえの喜ぶような事件は何もねえぜ。それに今月、北町は非番なんだ」

――あ、そうだったんだ。

乙女は内心そう思い、残念そうに唇を噛んだ。

南北両町奉行所は隔月交替で、月番が訴訟を受け付け、非番は前月の訴訟の整理に当たることになっている。といって非番の与力、同心の任務はそのまま続行されるわけで、月番、非番というのは、あくまで役所自体の訴訟受け付けを指していうのだ。

「それじゃ、まぁ、事件がなくて何よりですね……」
乙女が気のない口調で言うと、伊佐山はからかうように、
「何もなくて結構じゃねえかよ。不服そうだな、おめえ」
「いいえ、不服だなんて……」
乙女は口を尖らせ、小石を蹴った。
髷を娘島田に結い、化粧っけもほとんどなく、衣服も地味で、乙女はどこにでも居る裏店の娘のような拵えだ。しかしその立ち姿がしなやかで際立ち、すっきりと整った器量は更に申し分がなく、二十歳前の匂うような若さと美貌は隠しようがないのである。
これまで生来の捕物好きから、幾つかの難事件を解決に導き、小娘とはいえ、近頃では女丈夫ともいえるような風姿を身につけてきていた。
それに対し、北町奉行所定町廻り同心の伊佐山は、八丁堀同心の定服をきちっと着込み、竜紋裏のついた三つ紋付の黒羽織を巻羽織にし、着流しに佩刀、朱房の十手を腰に差して粋に雪駄を履いている。
中肉中背、顔つきは平凡で、一見どこにでも居るような中年男だ。しかしこの男をあなどれないのは、一刀流の開祖伊藤一刀斎の分派、関口一刀流の印可を受けた腕前で、剣は八丁堀随一といわれていることだ。

小吉の方は、着流しに白足袋、草履、房のない十手という拵えである。

小吉は下っ引き時代から幾つかの手柄を立て、そこからのし上がってきて岡っ引きとして独立した男だ。子牛を思わせる小肥り短軀で、事が起きるとがむしゃらに突進して行く猪突猛進型なのだ。

「で、おれになんか用か」

伊佐山が乙女に聞く。

「あ、はい、そうでした。伊佐山様の為にとびきり上等なお席を取ってありますから、いつでも見に来て下さいと、お父っつぁんからの言伝てです」

「そいつぁすまねえな、明日にでも見さして貰うぜ」

お父っつぁんとは乙女の養父、四世中村歌右衛門のことで、乙女は普段は木挽町にある河原崎座で雑用係として働いている。

河原崎座は中村座、市村座と並ぶ江戸三座のひとつで、三階席まである大一座だ。

今は弥生狂言として「石川五右衛門・釜淵双級巴・継子いじめ・藤の森・釜煎」という演目を上演している。

これは並木宗輔なる浄瑠璃作家の傑作で、宝暦六年（一七五六）に大坂姉川座で大当たりを取ったものだ。それを八十五年ぶりに歌右衛門が再演するや、連日の大入りで、評判を聞いた伊佐山が乙女に良い席をと頼んでおいたのだ。

「旦那がそんなに芝居好きとは思いませんでしたよ」
小吉が言う。
「石川五右衛門だけは別だぜ。狂言の主役は善人よりも悪党の方が面白えんだ」
「そんなもんですかねえ」
「それじゃ、わたしはこれで」
乙女が海賊橋の方へ戻ろうとすると、大勢の男女がぞろぞろと橋を渡ってやって来た。そのなかには子供の姿も見える。
男女は全員が町人で、中年に差しかかった商人や職人かと思われた。
何かあったなと思い、乙女の表情が張り詰めた。
「いってえ何事だ」
伊佐山が問うと、三十過ぎの夫婦者があたふたと進み出て、
「うちの娘が、日が暮れてもけえってこねえんです」
亭主の方が困惑した様子で言った。
「行方知れずなのか」
小吉が聞いた。
「いえ、それが……」
女房がそう言って口を濁し、子供を覗き込むようにして、「太助ちゃん、さっきの

話、もう一遍しておくれ」と言った。

子供は太助といい、失踪した子供と一緒に遊んでいたらしい。

「隠れんぼをしてたら知らないおじさんが寄って来て、あの鬼になってる子は誰だって聞いたんだ」

太助がかよちゃんだと教えると、男はかよの方へ寄って行き、何か話をしていたが、やがてかよと手をつないでどこかへ行ってしまったというのだ。

伊佐山の顔に緊張が走った。

「連れ去られたんだな」

「はい、そうとしか……それで皆さんが手を貸してくれて、こうして四方八方探してるんですが、かよはどこにも……」

父親が困憊した様子で答える。

かよのふた親は甚吉、おていといい、畳職人だという。手を貸してくれているのはほかの子の親たちで、全員が江戸橋広小路界隈に住む小商人や職人であった。

こういう時の伊佐山の対応は機敏で、町役人、自身番から人を出し、下っ引きらも動員して探索するよう、その場で小吉に命じた。

「けど旦那、こいつぁ月番のお役人に頼んだ方がよかありやせんかい。勝手に首突っ込んで、後でなんか言われたら……」

「そんなこと言ってるうちに探しに出た方が話が早えだろ。取り返しがつかねえことにでもなったらどうするんだ」
「へ、へえ、わかりやした」
伊佐山の雷が落ちる前に、小吉は泡を食って駆けて行った。
伊佐山は一団の方へ向かいながら、
「乙女、おめえも暇だったら手を貸せ」
「合点承知っ」
乙女が手を打って勇躍した。

三

「あー、疲れた疲れた、もういけないわ」
乙女は「ねずみ屋」に辿り着くなり、床几代りの空の醤油樽にぐったり疲れた様子で腰を下ろした。
店主の駒吉がその様子を眺め、「やぁねえ」と呟いて板場の方へ行き、自分の羽織を持ってきて乙女の背にかけてやる。
「何があったのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor